

中村沙絵著

『響応する身体 ——スリランカの老人施設ヴァディヒティ・ ニヴァーサの民族誌』

ナカニシヤ出版、2017 年、5,600 円＋税、390 頁

中村友香

本書は、スリランカの老人施設ヴァディヒティ・ニヴァーサにおいて、老病死を支える人々の関係性がいかに築かれているのか、苦悩や喪失の経験をめぐり人々がどのように感じ、関わり、行為するのかについて描くケアの民族誌である。ヴァディヒティ（高齢者の／年長者の）・ニヴァーサ（家／住居）は本書では単に「ニヴァーサ」「老人施設」「施設」と表記されることもある。スリランカでは、2007 年に著者が調査を開始したころ、都市部の上流階層の一部を除けば、施設に親を「入れる」ことは、非難されるべき行為として捉えられていたという。本書は、多くの人々が否定的な視線を向けるヴァディヒティ・ニヴァーサの暮らしの中で築かれる、間身体的な経験と有意味な関係性を描くことが目指されている。

民族誌的記述のデータは、スリランカ西南海岸地域及び北中央州の農村地域において、2007 年 2 月から 2010 年 5 月にかけて断続的に行われた調査に基づく。ヴァディヒティ・ニヴァーサに関する史料収集や、いくつかのニヴァーサの訪問調査、またモラトゥワにある MJS ニヴァーサでの参与観察調査、施設外における扶養の実態を明らかにするために行われた農村部での参与観察など、その内容は時間的にも空間的にも充実したものとなっている。

本文の構成は以下のとおりである。

はじめに	フィールドとの出遭い
序 章	ヴァディヒティ・ニヴァーサが投げかける問い
第 I 部	
第一章	老親扶養をめぐる規範と実態 ——シンハラ農村社会の家族と世代間関係から
第二章	シンハラ社会とモラトゥワ

	——ヴァディヒティ・ニヴァーサを取り巻く社会的・空間的文脈
第Ⅱ部	ダーナ実践がとりむすぶ社会関係
第三章	ヴァディヒティ・ニヴァーサの成立
	——ダーナを通じたチャリティの現地化
第四章	ヴァディヒティ・ニヴァーサを支える社会関係
第五章	揺らぐ「与え手／受け手」関係
	——ダーナ実践における相互行為とその意味
第Ⅲ部	施設における老いと死、看取り
第六章	「生活の場」としての施設
	——MJS ニヴァーサ概況
第七章	ヴァディヒティ・ニヴァーサで生きるということ
	——入居者たちの「人生の物語」と日常生活の記述から
第八章	ヴァディヒティ・ニヴァーサにおける死と看取り
結 論	ヴァディヒティ・ニヴァーサを支える関係性とその倫理
補 論	スリランカにおける高齢者福祉の展開

序章は、ヴァディヒティ・ニヴァーサの社会的位置と老いや苦悩、ケアをめぐる議論を検討し、調査地でみられる人々の結び付きを考察する視点を示す。現代スリランカ社会では、家族構成員と同居する高齢者の割合が8割前後であるものの、急激な少子高齢化と若者層の海外出稼ぎ、内戦の影響もあり、家族をめぐる状況や関係性が変化する局面を迎えている。そうした中で、著者は、ヴァディヒティ・ニヴァーサを、施設内外の多様なアクターが重層的に交錯する、社会に「開かれた」空間として位置づける。ここでは、財やサービスをめぐる贈与が、「パウ（気の毒／罪）」の感情に基づいて行われており、一見すると一方的な贈与によって相互性を否定して、優劣・従属関係を生みだしているかのように見える。その一方で、「ケアをめぐる連続性」の議論を対照してみると、与える主体と受け取る客体の境界が不明瞭になり、他者の窮状や苦悩、痛みを自らのものであるかのように経験したり、痛みを通じて病者自身が身をもって学んだりしたことを他者に開示するような「響応する身体 (communicative body)」[フランク 2002：213] という関係性のあり方がみえてくる。序章では、この「響応する身体」を、病者の選択と意思で生みだされるものにとどまらず、苦悩や痛みなどを持つ他者の身体に引き寄せられて応答したり傷ついたりする身体として捉えなおし、それを媒体としてどのような関係性が築かれ、自他の苦悩に対する感受性が育ちつつあるのかを明らかにしようという、本書の問題の核心が提示される。

第Ⅰ部では、ヴァディヒティ・ニヴァーサでの老いと扶養を理解するための背景となる、現代スリランカの概要が描かれる。第一章の「老親扶養をめぐる規範と実態」は、現代スリランカ社会において家族の中で老年がどのように経験されているのかを、シンハラの農村社会の事例を通して示している。日常生活における家族による老親扶養の現状が描かれた本章で、村外で職業を得る子どもたちが増えた現在、老親扶養を行うためには、村

に残った子どもと、村外の兄弟姉妹間の連携や協力が必須となっていることが指摘される。しかしながら老親扶養は、村に残って家屋や土地を相続した者と、村の外で自由に職業を選択した者との間にしばしば葛藤や衝突を生みだしており、農村社会での老年の生活が不確定な関係の中に置かれていることが指摘された。

第二章「シンハラ社会とモラトゥワ」では、施設という空間を、閉ざされて社会と隔離された場所としてではなく、地域の歴史や社会文化的文脈の中で展開する場として記述するために、中心的な調査地であったというモラトゥワのシンハラ社会が説明される。特に、本書で用いられる重要な概念、「ダーナ（＝布施）」と「パウ」について、社会的文脈に基づき説明される。モラトゥワは、仏教とカトリックが相互浸透してきた地域であり、この二つの語も、二つの宗教実践が交差する中で、仏教徒とカトリック教徒の両方にとってなじみの深い実践として捉えられているという。また、シンハラ社会の関係構築の特性を、ダーナをめぐるニヴァーサと施主の関係と比較して似たものとして説明するなど、地域の中に存在する社会的領域としてのニヴァーサを描いた。

第Ⅱ部「ダーナ実践がとりむすぶ社会関係」は、ヴァディヒティ・ニヴァーサに施設外部から持ち寄られる、食事や衣服、薬などの布施の実践について、その歴史的経緯とダーナをめぐる関係性について検討している。ダーナは、施設での生活を物理的に支える仕組みでもある。第三章の「ヴァディヒティ・ニヴァーサの成立」では、ダーナ実践における相互行為を取り入れた慈善施設が、どのような歴史的経緯の中で広く普及することとなったのかについて解明している。ヴァディヒティ・ニヴァーサ事業は、植民地時代には英国人篤志家や、プロテスタント諸派及びカトリック系のミSSIONナリー、1910年代後半からは、現地の富裕層や新興富裕層によるチャリティに支えられて発展した。こうした中でチャリティは、ダーナを媒介して現地化していく。これは富裕層が、食費の増大という問題に直面しながら、どうにか継続的・効果的に運営していこうという試行錯誤と、それを追善／追悼供養を兼ねた小さな寄付として、また入居者らに自らの老親の姿を重ねて扶養・看取りを追体験する行為として支えた中間層の人々との双方向的働きかけによって展開していると考察する。

第四章「ヴァディヒティ・ニヴァーサを支える社会関係」では、チャリティの現地化が、現地社会の追悼儀礼を変容させたこと、また老人施設が地域に開かれた社会的な場として定着していったことを指摘する。そのうえで、こうした社会関係は、ニヴァーサ事業の担い手と施主の二者関係を基盤にしながらも、口コミなどでも広がっているものであること、こうした社会奉仕事業が、政治的な権力との関わりの中で制限され、条件づけられている側面についても検討している。

第五章「揺らぐ「与え手／受け手」関係」では、施設におけるダーナ実践の場が、ダーナ施主と入居者の双方にとっていかなる経験であるのかをミクロな視点から追う。ここでは、上座仏教社会におけるダーナ研究の問題点をあげ、与え手と受け手の関係の揺らぎや、複数のアクターが関係性を構築しうる場としてダーナを捉える必要を指摘する。ダーナをめぐる関係性の揺らぎや転倒が起こる条件として、敬信に基づく配慮の双方向的関係性の喚起や、施主自身が自らの「パウ（気の毒）」な境遇をふりかえり、分かち合われる

状況を考察する。また、この関係性の連鎖は、例えば動物への餌づけなどを通じて、非人間的存在にも広がっていくという。このようなダーナ実践の語りを通じて、著者は、入居者たちが単なる受け手や功德行為の道具として固定化されず、連鎖する関係性も開かれていると主張する。

第Ⅲ部「施設における老いと死、看取り」は、参与観察とライフ・ナラティブ分析に基づく、MJS ヴァディヒティ・ニヴァーサの入居者とフロアスタッフをめぐる民族誌である。第六章「生活の場」としての施設」では、MJS ヴァディヒティ・ニヴァーサの生活世界を概観し、その特徴と考察の視座が示される。当該ニヴァーサは、アーヴィング・ゴフマン [Goffman 1961] のいう「アサイラム空間（全制的施設空間：庇護や隔離のための収容施設）」としての側面を持ち、そうした状況を緩和するための「二次調整」が例えば収集品を隠し持つ行為などを通じて行われているという。一方で、ニヴァーサは雑多な「訪問者」たちとの相互行為が展開する場であり、また寮母らが擬似家族的な態度を示そうとするなど、「管理・規律」「従属／抵抗」という単純な枠組みにとどまらない関係性が展開している。こうした点から、著者は「入居者役割」などの固定的な「役割」を通じて論じられる脱施設化研究の問題点を示し、これを乗り越える手法として、ライフ・ナラティブというアプローチを提案する。

第七章「ヴァディヒティ・ニヴァーサで生きるということ」では、入居者たちのライフ・ナラティブと日常の出来事や実践の記述を通じてヴァディヒティ・ニヴァーサでの老いの経験を浮かび上がらせようとする。一人ひとりの入居者たちの人生と施設での生や役割に関する主観的な意味付けや、自分では語らない入居者たちの事例の叙述を通じて、苦悩の言語化や分有をめぐる問題を考察している。著者は、苦悩を語ること、またそれを分有することの重要性を指摘するとともに、ニヴァーサの入居者たちは自らの苦悩に関して雄弁ではない事実を対照する。また養生実践や瞑想、宗教実践などの様々な実践を通じて、新たな関係性を構築することで、苦悩と付き合いおうとする人々の様相を描いた。そして、入居者たちとフロアスタッフたちの関係性を、響応する身体、つまり、そこにある苦悩を、身体を持って分有する相互的な関係性として考察した。

第八章「ヴァディヒティ・ニヴァーサにおける死と看取り」では、老い衰え、「死にゆく」人々の様子と、それを看取る人々の実際を描いたうえで、臨床現場の中心的アクターともいえるフロアスタッフがどのようにそれを受けとめ、語ったのかを分析する。そしてスタッフたちの看取りの中の感情的な反応を糸口に、フロアスタッフと入居者との関わりやそこでの関係倫理が描写される。スタッフたちは「生きていても意味がない」など、一見すると入居者を＜社会的死＞を迎えた者として捉えるかのような行為をしているようにみえるが、そうではない。寧ろ彼らは、老病死にともなう身体の老朽や精神的な動揺は自分にもいずれ起こりうる事態であると感じ、*「私があなたである（ありえた）」*世界を生き失っているのである。つまり彼らは、痛みや苦悩を抱える他者に引き寄せられながら生きているのであり、そうした相手に対してより良いケアを目指すことで、自らの未来に働きかけようとしているのではないかと指摘する。

結論「ヴァディヒティ・ニヴァーサを支える関係性とその倫理」では、響応する身体の

媒介する、老病死を支える関係性とはいかなるものであったのかという問いをめぐり、これまでの議論が整理される。ヴァディヒティ・ニヴァーサでの関係性を通じてみえてきた響応する身体とは、意識的選択か否かに関わらず、身体—自己が他者に引き寄せられて応答してしまう、もしくは傷ついてしまうという間身体的な経験を可能にするような開かれた身体である。こうした関係は、例えばダーナ実践や、「パウ」の感情や概念、もしくは入居者が餌づけを行う動物たちなど、行為者を取り巻く環境に媒介されながら達成されているという。こうした響応する身体は、苦悩に巻き込まれ、それを自らも免れえないであろうことを了解しながらも、慈善的贈与や世話、看取りなど自己を差しだし続けるのであると結ぶ。

最後の補論「スリランカにおける高齢者福祉の展開」では、現代スリランカにおけるヴァディヒティ・ニヴァーサの位置づけを明らかにするため、独立後のスリランカにおける社会保障・医療サービスと「高齢者福祉」の展開を記述している。独立後のスリランカでは、公衆衛生や保健サービスの整備、教育や医療の無償化などの社会福祉サービスの充実化が図られてきた。しかしながら老年医療や老後の社会保障は十分とはいえず、高齢者の生活が安定したものであるとはいえないようだ。そうした人々のセーフティーネットの一つとしてヴァディヒティ・ニヴァーサは位置づけられるが、その運営について政府は部分的な補助をするにとどまっており、各施設が「自立した」運営を行うことを望んでいるという。スリランカにおける老人施設は、一般の人々を活動に取り込む形で支えられ、また更なる発展を遂げることを期待される状況であると指摘された。

以上のように本書は、老人施設であるヴァディヒティ・ニヴァーサを多様な相互関係が生まれている社会的領域と位置づけ、そこで交錯する身体を通じた関係性を描いた。本書にはいくつかの意義と可能性がある。一点目は、本書が、高齢者をめぐる暮らしと、その中での人間関係を微視的に、繊細に記述したものでありながら、その社会地獄的背景、歴史的背景を織り込むことで、彼らの生きる世界をより立体的に説明している点である。福祉や医療をめぐる施設化は、産業先進国の制度や方法の導入という背景を持つものがほとんどである。一方で、こうした施設はどんなものでも、地域の社会文化や政治経済との関係の中で、地域的に発展していくものであると考えられる。著者は、老人施設を社会的領域として描くことによって、スリランカにおける開かれた施設の様子を叙述することに成功しているといえる。ライフ・ナラティブや参与観察による記述は厚く読みごたえのあるものである。しかしそれだけに頼らず、歴史的・空間的に広がりのあるデータの収集と提示をしており、老年人類学やケアの人類学の分野へはもちろん、歴史や政治分野へのアプローチを可能にしたといえる。

二点目は、響応する身体という枠組みを使って、既存の、また一般言説における「老人」や「病者」などの役割、また社会的帰属や立場、宗教やカースト、親族関係とは別に、環境や文化的装置に媒介されながら、場を共有する者同士が「身体」や「苦悩」を通じた関係性を生みだしている様子を描いた点である。これは、南アジア特有のパーソン(dividual)概念とサブスタンス論では捉えきれない、人々との繋がりや関係を示していると捉えられる。こうした繋がりや関係は、老人施設以外にも例えば、医療施設での患者—患

者、患者—医療者、患者—家族など、また家政婦の家事労働などをめぐる家政婦—家族関係など、様々なところに立ち現れる可能性がある。また、本書で中心的に観察された、MJS ニヴァーサにおいても例えば、本書のところどころに登場するアーユルヴェーダ医や近所の教会の司祭、時々やって来るかもしれない外国からの支援者などとの間には、どのような繋がりや関係が生じているのだろうか。外国から来た人類学者である著者と入居者とのやりとりや著者の動揺、感情が真摯に記述される場面では、著者自身が響応する身体になっているようにもみえ、響応する身体の広がりを示しているともいえる。間身体性に関わる経験と社会的文脈をめぐる議論の更なる発展は期待されるところであろう。

三点目の意義深い点は、響応する身体による関係性が、苦しみを持つ者の選択や行為、また「語り」にさえ必ずしも規定されないと指摘されたことである。老いや病いなどの生の偶発性を帯びた身体が、環境に媒介されることで、他者との連続的で共同的な関係性を生むというのである。産業先進国を中心とする、医療や福祉をめぐる専門家制度の中では、こうした結び付きや共感、個人的な感情や思い入れであり、押さえつけるべきものとして否定的に捉えられるかもしれない。しかし、例えばこうした感受性は、生きることにもなう苦しみや不確実性、またそれと共に生きる高齢者や障がいを持つ人々、病者などの存在を忌避し、隔離し、否定してしまうような危険性から、私たちを救ってくれる可能性を持っているといえる。こうした態度は、著者もあとがきで触れるように、一見すると倫理や道徳の話に終始するばかりで、老病死やケアをめぐる非対称的な現状の維持に加担しているようにみえかねない。確かに、本書で示された響応する身体は、格差や権力関係の解消や、「苦悩」を抱える人々をその偶発性から「救い出す」ことを意味するわけではない。しかしながらそれでも、本書でなされた身体と関係をめぐる考察は、苦悩やそれと共に生きるというあり方を絶望し回避しなければならないものと捉えるのではなく、模索と行為を続け、生き延びていくことができるという肯定的で重要な可能性を示している。本書は、多角的なデータに基づくスリランカの老人施設をめぐる地域研究であり、同時に生きること、衰えること、弱ること、そして死ぬことをめぐる難問の糸口を示すものであるといえる。

<参考文献>

フランク、アーサー・W. 2002 (1995) 『傷ついた物語の語り手—身体・病・倫理』 鈴木智之訳 ゆみる出版。

Goffman, Erving 1961 *Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates*. New York: Doubleday Anchor.